2025 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**英語圏児童文学に登場するドラゴン像の変化について** **ーイギリスで出版された 1870 年代～1970 年代の本を中心にー**
キーワード	①英語圏児童文学、②ドラゴンの表象、③多様性

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	ヤマモト　マリヤ 山本　麻里耶
配付時の所属先・職位等 （令和７年４月１日現在）	川村学園女子大学　文学部　国際英語学科　講師
現在の所属先・職位等	川村学園女子大学　文学部　国際英語学科　講師
プロフィール	白百合女子大学大学院文学研究科児童文学専攻博士後期課程単位取得満了退学。高等学校教員、大学非常勤講師を経て、2024 年より現職。 専門は「英語圏児童文学（ファンタジー）におけるドラゴンの表象」について。『ゲド戦記』シリーズ（ル＝グイン）に登場するドラゴンに感銘を受け、ドラゴンの表象研究を行っている。これまでに『ゲド戦記の世界「ゲド戦記」はじめて読本』（共著、近代映画社、2006）、『子どもの本と〈食〉―物語の新しい食べ方』（共著、玉川大学出版部、2007）なども刊行。近年の論文に「『ヒックとドラゴン』シリーズにおけるフュリオスとオーディンファング―悩みはじめた幼年文学のドラゴンたち」（『川村英文学』第 30 号、2025）がある。

1. 研究概要

本研究は、1870 年代から 1970 年代にイギリスで出版された児童向け小説（以下、児童読み物）を対象とし、物語に登場するドラゴン像がどのように変化してきたのかを明らかにすることを目的とする。児童読み物は絵本と異なり、読者が文字情報を手がかりに想像力を働かせて物語世界を構築する媒体である。そのため、ドラゴンがどのように描かれ、人間とどのような関係を結ぶ存在として扱われてきたのかを検討することは、ドラゴン像の変遷を理解する上で重要である。本研究では特に、ドラゴンと人間との関係性の変化に注目する。

現在ではドラゴンは児童書や映画などに広く登場するが、19 世紀前半のイギリス文学においてはほとんど見られなかった。当時のドラゴンは宗教的象徴と結びついており、物語の登場人物として扱いにくい存在であったためである。しかし、19 世紀に科学が発展し、古代生物の化石が恐竜として理解されるようになると、人々の想像力は大きく刺激された。こうした知識の普及は、ドラゴンを宗教的象徴としてのみ捉える枠組みを揺るがし、多様な意味づけを可能にした。その結果、ドラゴンは物語に取り入れやすい存在へと変化し、19 世紀後半以降の児童文学では、人間（異種族）と対話し、関係性を結びうる存在として描かれる例が増加した。

ドラゴン研究の先行文献としては、Yolen（1964）、Blount（1974）、Prickett（1979）、Berman（1984）、Evans（1987）、Shastri（1993）などがある。特に Shastri はドラゴンを 3 類型に分類しているが、絵本と児童読み物を区別していない点に一定の限界がある。両者は情報の受容形式が異なるため、ドラゴン像の形成にも差異が生じる可能性が高い。本研究はこの点を補完

するものである。
調査では、大英図書館のデータベースを用いて 100 冊以上の候補作品を抽出し、入手可能な資料を収集・精読した。最終的に本助成金を利用して 46 冊を新たに入手し、既所蔵資料を含めて計 78 冊を収集した。そのうち、ドラゴンが物語において重要な役割を果たす児童読み物 34 冊を分析対象とした。本研究は、イギリス児童読み物におけるドラゴン像の変遷を体系的に示す試みである。





2. 研究の動機、目的

ドラゴンは児童文学や絵本、映像作品などで広く親しまれてきた存在であるが、その表象がいかに形成され、どのように変化してきたのかについて、体系的に整理した研究は多くない。特に、児童読み物に焦点を当て、ドラゴンの描写の在り方や物語内で担う役割を検討した研究は限られている。
児童文学におけるドラゴン研究としては、Hope Shastri の博士論文 *Picture Book Dragons*（1993）がしばしば参照されているものの、Shastri は主に 20 世紀後半の作品を対象に、ドラゴンを「野生」、「家庭的」、「空想上」の 3 類型に分類した。この枠組みは有効であるが、絵本と児童読み物を区別していない点には課題が残る。両者は情報の提示方法や読者の受容の仕方が大きく異なるにもかかわらず、同一の分析枠組みで扱われてきた点は問題である。
さらに、Shastri の研究は 20 世紀後半に偏っており、ドラゴンが児童文学に登場し始めた 19 世紀後半については十分に検討されていない。この時期はファンタジーというジャンルの成立期でもあり、ドラゴン像の形成過程を把握する上で重要である。
以上の問題意識から、本研究では 1870 年代から 1970 年代のイギリス児童読み物を対象に、ドラゴンの表象を分析することを目的とする。また、Shastri の 3 分類の妥当性を検証し、必要に応じてその再解釈を行うことで、ドラゴン表象をより構造的に整理することを目指す。このように、本研究は、児童文学における想像上の存在の捉え方の変化を明らかにするとともに、多数の作品を通時的に分析することにより、個別研究では捉えにくい表象の変化を体系的に把握し得る点に独自の意義を有する。

3. 研究の結果

本研究では、収集した児童読み物 78 冊のうち、ドラゴンが顕著な役割を担う 34 作品を抽出し、分析対象とした。分析に際しては、「A. 出現」、「B. 対話」、「C. 戦闘」、「D. 討伐」、「E. 討伐を伴わない結末（共存・別離・退去など）」の 5 要素を設定し、各作品における要素の組み合わせとその変化を検討した。なお、本研究では、単なる発声や行動理解ではなく、言語的・意味的な相互理解が成立する場合のみを「B. 対話」として扱う。

① 34 作品の分析結果

分析の結果、19 世紀後半（1870～1890 年代）には、「A. 出現」、「C. 戦闘」、「D. 討伐」によって構成される一方向的な物語が主流であり、ドラゴンは対話不能な怪物として描かれ、戦闘ののちに討伐される構造が中心であった。
これに対し、1890 年代以降は「B. 対話」を含む作品が増加し、20 世紀中葉には「A→B→E（共存）」という構造が顕著に見られるようになる。対話の導入により、戦闘や討伐は必須ではなくなり、ドラゴンは人間と関係を結びうる存在として描かれる傾向が強まる。
一方で、対話を伴わないにもかかわらず象徴的理解に至る例も確認される。ただし、これら

の事例におけるドラゴンは、言語的・意味的対話を行う主体ではなく、自然的・象徴的存在として把握されるにとどまる。したがって、単なる発声や行動理解と、言語的対話による相互理解とは区別される必要がある。

また、討伐を中心とする構造は時期によって変動し、20 世紀初頭には一時的に強まるものの、その後は相対的に比重を減じていく傾向が確認される。同時に、戦闘そのものも次第に弱まり、関係性や象徴性を重視する物語が増加する傾向が見られる。

以上の結果から、ドラゴンの表象は、「討伐対象」から「対話可能な他者」、さらに「共存や意味を媒介する存在」へと変化してきたといえる。これらの変化は、ドラゴンの性質そのものの変化ではなく、出現から結末に至る物語の展開の仕方が再編成されていることを示している。特に「B. 対話」、すなわち言語的・意味的な相互理解を伴う対話の導入は、物語構造全体を変化させる主要な契機である。

② Shastri の 3 分類との比較

本研究から明らかになったのは、ドラゴンの性質は固定的なものではなく、物語構造の中で生成されるという点である。特に「B. 対話」の成立の有無は、ドラゴンが「排除される対象」か「関係を結ぶ他者」かという位置づけを決定する。例えば、野生的に描かれるドラゴンであっても、対話が成立すれば人間との関係は変化し、共存へと至る。このとき、そのドラゴンは結果的に「家庭的」な存在として理解されるようになる。

この点は、Shastri の 3 分類が固定的なカテゴリーではなく、対話を軸とする物語構造の中で可変的に生成される類型であることを示している。また、対話を伴わずに象徴的理解に至る例の存在は、ドラゴン理解が単一の進化過程では説明できないことを明らかにしている。

したがって、ドラゴン表象は「存在の分類」としてではなく、「人間との関係」や「物語内でどのように扱われるか」という観点から捉え直す必要がある。以上のことから、ドラゴン表象は存在の変化としてではなく、人間との関係のあり方の変化として理解されるべきである。

4. 研究者としてのこれからの展望

上記の研究結果により、1870 年代から 1970 年代にかけてのイギリス児童読み物に登場するドラゴン像の変遷については、基礎的な調査を一通り終えることができた。今後は調査範囲を 20 世紀末まで拡大し、児童読み物におけるドラゴン像がその後どのように変化していくのかを継続的に検討していきたい。

また、同時期のアメリカの児童読み物に登場するドラゴン像との比較を通して、地域差や文化的背景の違いが表象に与える影響を明らかにすることも今後の課題である。これらの成果については、最終的に学位論文として取りまとめることを目標としている。

さらに、本研究の一部成果を基に、2026 年 7 月にカナダで開催される学会の研究発表部門に応募したところ、発表の機会を得ることができた。本発表を通して海外の研究者と意見交換を行い、研究の視点を広げる契機としたいと考えている。今後も国際的な研究交流を継続しながら、児童文学におけるドラゴン表象研究の発展に寄与していきたい。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

英語の古本（文献）調査を行う際には、まず日本および海外の大学図書館や公共図書館、インターネット上で無料公開されているサイトを確認し、所蔵の有無を調査します。本研究においても、多くの大学図書館や公共図書館、オンライン資料にお世話になり、複写や貸出サービスを活用してきました。

しかし、図書館の蔵書には限りがあるため、必要な資料を十分に収集するには、古書の購入が不可欠となります。特に古い時代の海外文学を調査する場合、作品の存在を確認できても、その内容を実際に読むまでは研究対象として適切かどうかを判断することができないため、現物の入手が必要になります。

本研究のように作品の変遷を追うためには、多数の文献を収集する必要があり、相応の費用を要します。海外の古書は、購入の機会を逃すと再入手が困難な場合も多く、また希少性や世界情勢の影響により、価格や輸送費が大きく変動することもあります。このたびご支援を賜っ

たことで、複数の貴重な資料を確保することができ、当初計画していた調査を着実に進めることができました。心より感謝申し上げます。

ドラゴンは現代人にとっても比較的身近な存在ですが、英語圏の児童文学に登場するドラゴンについては、これまで絵本と児童読み物との違いが十分に区別されないまま研究されてきたため、その特徴や役割は十分に整理されていませんでした。本研究はその一端ではありますが、ドラゴンの描かれ方を整理し、理解を深めることができたと考えています。

本成果はまだ小さな一歩にすぎませんが、今後も研究を継続し、より多くの方に関心を持っていただけるよう、知識と情報の発信に努めてまいります。